

Title	リシエ総合文化史論 下巻, (シャルル・リシエ原著, 間崎万里譯)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Arigo, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.172(354)- 174(356)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0172

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リシエ綜合文化史論 下卷

(シャルル・リシエ原著)
問崎万里譯

かつた祕密が大戦後暴露せられたため新資料によつて全く書き改められ、その全貌が際立つて明かにされた上、新に六章百八十一頁が書き加へられ、世界大戦の前奏曲たる兩度のバルカン戦争に於ける利益分配に絡まる紛糾せる事件が鮮かに解明せられ、世界大戦を説く諸章に於ては、列強の軍擴とサラエヴォの事變から生れた波瀾重疊の外交戦、大戦の破裂からバルカン諸國の向背と日伊米の参戦、ロシア兩度の革命と休戦外交、巴里會議とヴェルサイユ平和條約及びその他の諸條約が説かれてゐる。この下卷に於ては六號活字の割註が著しく増加し事件の結末や諸著から引用しての批評が微細の點まで加へられてゐる。又固有名詞和洋對照表の外、卷末には組方は少し工夫ありたいと思ふが、前回希望して置いた索引を新に附加し、又全卷を通じて上欄に小見出しを附したることは舊著に比し著しく讀者に便利を與へてゐる。

要するに、全卷を通じて史實が程よく按排せられ、一貫して讀むのに何等の凝滞を覚えしめない敘述の方法は、斯學に精通せる林博士にして始めてなし得る處であらう。この名著によつて、昨今八釜しい『非常時』とか『一九三五、六年の危機』とかいふ言葉がどうして起るのか。軍事費の膨脹が非常時を作るのかそれとも非常時なるが故に軍事費を膨脹させて他を省みないのであるか。それ等についての確な判断を下し得る基礎的知識が與へられる。我等はこゝに本書の恩恵に浴し得ることを欣幸とする。各卷定價三圓五十錢。(問崎万里)

綜合文化史論の上卷は既に昭和八年に出版され、讀書界に多大なる歡迎をうけたが、今また其の下卷が上梓されて、著ねく歴史學徒の待望に添ふことゝなつた。蓋し斯かる名著の完璧なる邦譯が公にされたことは、我が西洋史學界の慶事として特筆しなければならぬ。

我等は既に上卷に於て平和主義と個人の尊重と而して科學に對する絶對的信仰とを基調とする著者獨特の史觀に接することが出来た。そこでは太古からフランス大革命直前までの時代が著者の犀利なる史眼によつて解剖され批判され、而かも最もよく綜合されてゐる。上卷に見らるゝ斯の如き特色は、フランス革命より世界大戦までを敘述した下卷に於ても遺憾なく發揮せられ、上下二卷よく首尾一貫した世界史が構成されてゐるのである。

リシエは第十九世紀を以て科學の時代であるとす。従つて氏の科學尊重の精神は下卷に於て最も強く示されてゐる。即ち著者によれば、人類世界が今日の如き驚くべき力を得たのは、科學とそれを應用せる工業の賜であり、政治を改革し之を統制し而して其の弊害と過誤とを矯正し得るものは科學の教育のみであり、更に二十世紀の新社會は絶對に科學を信頼する時にのみ必要な進歩を遂げ得るものであるとするのである。

既に上卷に於て印刷機の發明が人類史上に新舊兩時代を劃せり

と斷じ、印刷機の無かりしが故に思想の傳播の極めて緩慢なりし時代を舊時代と呼び、印刷機によつて一人の思想が忽ち數多の人々に傳達され萬人結束の力を得た時代を新時代なりと論じた著者は、鐵道も亦た世界を二つの時代に分つたと言ひ、科學の應用による交通並に通信機關の發達は、人類の共同を原理としてよりも寧ろ事實上にて於て齎らしたと述べ、斯くして人類の生活に國際的共同の必然的なる所以を指摘し、人類は世界的協力によつてより文明的なる社會、より自由なる個人、より寛大なる人間性を築くであらうと述べてゐる。

また著者の専門である醫學については、その敘述は最も詳細であるが、就中、種痘の發見者たるジェンナーや病原體の發見によつて醫學に革命的進歩を齎らしたパスター等の功績を讃へ、豫防醫學の發達は人間の愚行が戦場で殺した以上の人命を救助したと論じてゐる。

元來平和論者たる著者が、國際聯盟を以て「最も偉大なる進歩」と觀るのは當然であり、國際仲裁々判の制度が如何に多くの重大問題を解決し得て、國際間の平和を維持するに役立つたかを強調するのも肯かれる。西洋史上に最も華々しい大ナポレオンの戦争が、リシエ氏に於ては只だ非難の對象に過ぎないのも尤である。ナポレオンの出るに及んでフランスの戦争は最早や祖國の防禦でも自由の勝利でも人類の解放でもなくなり、たゞ掠奪となつたといふのが著者の見解である。またロシヤ遠征に失敗したフランス軍の慘狀を敘しては、「この退却こそは若い人々に戦争を憎み征服者を嫌惡せしめんがため、倦まず繰返して物語られねばならぬ災

禍の一である」といひ、却つて所謂小ナポレオンが其の民族主義の故を以て賞讃されてゐるのも皮肉である。一八六〇年イタリイからサヴォイとニースを割取するに當つて、その地に實施した人民投票を以て、ナポレオン三世の「全く純眞な榮譽」とするものがそれである。

斯の如く専制君主が彼一個人の名譽の爲に、幾多の尊い生靈を犠牲に供し、國家の荒廢を齎したほかに、何等の利益も見出し得ない無謀な戦争は非難するけれども、自由の爲に戦つたフランス大革命時代の對外戦争の如き、又は植民地の自由と權利との爲に蹶起したアメリカ獨立戦争の如き、さては國民統一の爲にイタリイ人の奮起した對埃戦争の如きは何れも正義の戦争なるが故に是認するのである。永遠の平和は人類最大の理想であり、戦争そのものは極力排斥せらるべきものではあるが、然かも斯の如く正義の爲の戦争はこれを承認するに吝でない。同様に武力による征服も、未開人に光明を齎らし悪疫や内亂の爲に疲弊した住民に安寧を與へたものは、例へばルイ・フィリップによるアルジェリヤ征服の如く、單にこれを是認するの程度に止らず、これを以て北アフリカにアラビヤ・フランスの大植民國家の建設された光輝ある端緒であると賞讃するのである。

また著者の日露戦役に對する見解も注意に値する。彼はこの戦争が日本にとつて東洋の平和を確保せんが爲の正義の戦争であつたことを特に認めてはゐないが、日本の勝利の原因を正當に指摘して、「日本が一八六九年以來進歩主義をとり、ヨーロッパの文明を多く取り入れ、しかもその人種の傳統的精神たる忍耐、執拗、

規律、死を恐れぬ氣風を失はず、陸海軍のよく統制され、堅忍不拔の勇氣を示した」といひ、また戦後の獲得については、「完全な勝利を得ながら日本人はその勝利に於て謙讓だつた」と述べ、日本の獲得が不釣合に少なかつたことを言つてゐる。更に注意すべきは、「この悼ましい戦争はロシヤとヨーロッパの値打を下げた」と斷じ、三億のヨーロッパ人と六億のアジヤ人とは何等共通の記憶も希望も持たない明らかなる對立であると述べてアジヤ民族を警戒してゐる點である。

以上は本書の特色についてその一斑を述べたに過ぎないが、平和主義や國際主義を強調する本書は同じく間崎教授の譯筆に成るヴォルフ氏の民族文化史が軍國主義、國家主義を幟標とするのと好個の對照をなしてゐる。同教授が西洋史の文獻中、かくの如く特色あるものを選んで譯出せられたのは、勿論我が國の歴史教育に資せんが爲であつて、本書の如き良書を熟讀玩味することによつて初めて歴史事實の生きた解釋法を學ぶことが出来る。譯文についてはそれが詩的な流麗さと學術的な正確さとを兼備した最も勝れたものであること、改めて呶々するを要しない。卷末には上下二巻を通じての和洋兩様の總索引が附せられ、上巻にこれを缺いた不便が除かれてゐる。斯かる良書の公にせられたことを慶とし、譯者の勞に敬意を表し、弘く世の研究者、教育者、讀書家に一讀を薦むる次第である。(東京刀江書院發行、定價上製三圓、學生版二圓五十錢)(有賀春雄)

國際紛爭史考 (板倉卓造著) 中央公論社發行

他人の著述を正しく批評し得る爲には評者は著者と同等或は、以上の學力・識見を持つことが必要條件である。今私の場合には、この二つの中の何れの條件をも備へてゐない。従つて、私は全く評者としての資格者であるから、たゞ恩師の著述を紹介し、讀後感といふ様な私自身の感想を述べさせて頂くことにする。

本書には十六件の國際紛爭事件が敘述されてゐる。日露戰爭關係の紛爭事件三件、世界大戰關係のもの四件、外交上の慣例に關する事件六件、其他三件である。

先づ本書の第一の特色は記述の平明、行文の流麗なることである。元來法律關係の著述には、文章がぎごちないので讀者をうんざりさしてしまふ物が非常に多い。この結果、法律書は固いだけで無味乾燥のものであるといふ一般的な考へ方を社會の人々に植ゑ付けてしまつた。然し、本書は全くこれに反し、著者がその序文中に述べられてゐる様に、「寝轉んで讀」み得る柔かさを持つてゐる。この點は先づ讀者に、小説を讀む様な長閑な心安さを以て接することを得せしめる。

第二は材料の選擇が當を得てゐることである。國際紛爭事件の中には、法律的觀點からすれば興味はあるが、一般讀者には更に面白くないものが多い。専門家以外の人々の興味を惹く爲には、事件の内容が相當の變化を持ち、讀者の好奇心を湧かしめるものでなければならぬ。本書に收録せられた事件は何れもこの條件を